

[1320]

氏名 (生年月日)	<small>ドゥエニャス イアン フランシス カリリョ</small> DUENAS IAN FRANCIS CARILLO (1984年10月4日)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博甲第138号
学位授与の日付	2019年7月26日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	Developmental stages in the acquisition of English <i>wh</i> -questions by Bisaya-speaking children
論文審査委員	主査 平川 眞規子 副査 若林 茂則・マシューズ ジョン・Lee, Aldrin P

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1) 博士論文の主題

本研究は、フィリピン南部地域で話されるビサヤ語を母語とする子どもを対象とし、第二言語としての英語のWH疑問文の習得について、生成文法を理論的枠組みとして、誘引發話タスクを用いた2回の実験によって横断的に集めた計500人分のデータを分析することにより、その基盤となる言語知識の発達過程を明らかにした。これまで、ビサヤ語母語話者の英語習得に関する先行研究は皆無で、母語と第二言語の交差言語的な違いから新たな知見が得られるとの予測を立てて研究を進めたが、実証的なデータの中に、先行研究で提案され一般的に受け入れられてきた普遍的発達過程では説明不可能な現象を発見している。ビサヤ語など、動詞が文頭に置かれるV1言語を母語とする学習者のヨーロッパ言語の形態統語習得に関する研究では、今後、広く言及される研究となると考えられる。

2) 博士論文の構成

本論文の構成は、以下の通りである。

1. Historical Background of English as a Second Language in the Philippines
 - 1.1. Spanish Colonial Period
 - 1.2. American Occupation
 - 1.3. Present Day
2. Grammatical Description of Bisaya
 - 2.1. Nominal Markers in Bisaya
 - 2.1.1. Focus Markers: *si* and *ang*
 - 2.1.2. Non-focus Markers: *ni/sa* and *ug*

2.2. Verbal Morphology

2.2.1. Aspect

2.2.2. Focus

2.3. Word Order Derivation of Bisaya Languages

3. A Comparative Description of *Wh*-questions in English and Bisaya

3.1. *Wh*-questions in English

3.2. *Wh*-questions in Bisaya

4. Theoretical Background

4.1. Input and Learning Environment

4.2. Age of Exposure: L2 child (simultaneous versus sequential) vs. L2 adult acquisition

4.3. L1 Transfer

4.4. UG

4.5. L2 Acquisition

4.5.1. General Characteristics

4.5.2. Parameter Resetting, Feature Re-assembly or Multiple Grammar

5. L1 and L2 Acquisition Path for English *Wh*-questions

5.1. L1 Acquisition

5.1.1. Klima and Bellugi (1966)

5.1.2. Brown (1968)

5.1.3. Lightbown and Spada (2006)

5.2. L2 Acquisition

5.2.1. Ravem (1970)

5.2.2. Hakuta (1976), Shimada (1986)

5.2.3. Cazden et al. (1975)

5.2.4. Johnston (1985), Pienemann and Mackey1993)

5.3. Subject-Object Asymmetry

5.4. Auxiliary Verb-Related Errors

6. Experiment 1

6.1. Objective

6.2. Research Questions and Hypothesis

6.3. Materials

- 6.4. Participants
- 6.5. Experimental Design and Protocols
- 6.6. Target Sentences
- 6.7. Results: Word Order
- 6.8. Results: Accuracy Rate
 - 6.8.1. Correct Responses
 - 6.8.2. Type 1 Errors: Auxiliary-related Errors
 - 6.8.3. Type 2 Errors: Different forms of *wh*-question

7. Experiment 2

- 7.1. Objectives
- 7.2. Research Questions and Predictions
- 7.3. Materials
- 7.4. Participants
- 7.5. Results 1: Word Order Patterns
 - 7.5.1. Subject *wh*-questions
 - 7.5.2. Object *wh*-questions
- 7.6. Results 2: Production Rate of Target Responses
 - 7.6.1. Subject *who*-questions
 - 7.6.2. Subject *what*-questions
 - 7.6.3. Object *who*-questions
 - 7.6.4. Object *what*-questions

8. Discussion

Part 1: On *Wh*-question Type and *Wh*-word

Part 2: Developmental Stages

Developmental pattern of subject *wh*-question among Bisaya-speaking children.

Developmental pattern of object *wh*-question among Bisaya-speaking children.

9. Concluding Remarks

References

Appendix 1: 61 Types word order patterns for subject *wh*-questions

Appendix 2: 77 word order patterns for object *wh*-question stimuli

3) 論文の概要

本論文は、フィリピンにおける英語の位置付け、ビサヤ語の統語に関する分析、英語とビサヤ語における *Wh*-疑問文の言語学的分析、先行研究および本研究における 2 つの実証的研究の詳細とそれらの結果、考察、今後の方向性に関する 9 章から構成されている。

第 1 章では、まずフィリピンにおける英語の位置付けについて、歴史的に概観している。スペイン領時代に遡っての概説、またアメリカ統治下において英語が学習言語として導入されたことなど、今日に至るまでの状況が説明されている。現在、フィリピンでは、6 歳児から英語の教育が開始されているが、あくまでも学校内における言語使用のため、一般的な英語を第二言語として学ぶ学習者と同様の問題を抱えていることが予測され、本研究の背景と意義が明示されている。

第 2 章では、まずビサヤ語の文法、特に語順 (V1) や主語や目的語の捉え方、それらに付随する形態素について、概説がなされている。続く第 3 章では、本論文の研究テーマである *Wh*-疑問文について、詳細な言語学的分析がなされている。英語の主語疑問文 (WH-AUX-V-N) と目的語疑問文 (WH-AUX-N-V) の語順を比較し、ビサヤ語では、主語疑問文と目的語疑問の両タイプに (WH-*ang*-V-N) の語順が用いられること、さらに、この語順が見かけ上では英語の主語疑問文の語順に対応することを述べている。また、英語では、助動詞 (AUX) が疑問文では統語構造上、Tense から Complementizer へ移動する (T-to-C movement) が、ビサヤ語には助動詞が存在せず、見かけ上類似する *ang* は英語とは異なり機能語の範疇に属するという分析を展開している。

第 4 章では、本論文が採用する枠組みである生成文法における言語獲得メカニズムについて、論じている。第一言語獲得における普遍文法の役割、そして第二言語習得においても普遍文法が同様の働きを果たすか否か、についての議論が展開されている。また、第二言語習得に関わる他の要因として、年齢と母語を取り上げ、特に母語の役割に焦点を掘り下げて論じている。

第 5 章では、*Wh*-疑問文の第二言語習得に関する先行研究を概観し、母語話者および第二言語学習者が共通に抱える助動詞の誤用について論じている。また、先行研究の多くが、自然環境における第二言語習得であり、本研究の対象者である幼児が教室という限られた環境において英語を習得する状況は、今まで扱われてこなかった点に言及している。さらに、本実験における仮説と予測について説明が施され、本研究により新たな知見が得られる可能性について述べられている。

第 6 章では、先行研究で得られた知見と自らの知見を融合させて立案し、実施した実験 1 について、その手法、結果、分析、考察の順に説明がなされている。対象とした 48 人の子どものうち、33 人の回答を有効とし分析した結果、目的語疑問文 (*Who is the monkey pushing?*) が期待される際にも、主語疑問文 (*Who is pushing the monkey?*) で答える誤答パターンが発見された。この要因を探るために、実験 2 においては、より広範囲な年齢の子どもの対象に、実験が行われている。

第 7 章では、小学校 1 年生から 6 年生までの総勢 420 人のビサヤ語母語児と 48 人の英語母語児を対象とした実験 2 について、詳細な報告と考察が提示されている。そして、実験 1 で得られた誤答の傾向が再度確認されたこと、さらに、主語と目的語が生物か無生物かでも正解率が異なる点が発見し、先行研究の見解とは異なる新たな見解として、主語疑問文と目的語疑問文が、以下にあるよ

うに、それぞれ別の発達過程を辿るという主張を行なっている。

(i) Subject *wh*-questions

Who pulling the boy? → *Who the/does pulling the boy?* → *Who is pulling the boy?*

(ii) Object *wh*-questions

What the car pulling? → *What the car is pulling?* → *What is the car is pulling?* →

What does the car pulling? → *What is the car pulling?*

第8章では、第6章および第7章の結果を基に、なぜビサヤ母語児にとり英語の疑問文のタイプにより発達過程が異なるか、考察がなされている。そして、主に3つの観点（英語の目的語疑問文の統語的特徴、学習者の受ける言語インプットの質と量、ビサヤ語の疑問文の統語的特徴）から丁寧に議論がなされ、先行研究にはないビサヤ語母語児に特有の誤用と英語の発達過程について、新たな分析が提案されている。最終の第9章では、本論文のまとめとして、ビサヤ語母語児にとって、英語の統語的特徴である助動詞の移動（T-to-C movement）の困難さとその発達過程と残された課題や将来の研究の方向性が提示されている。

4) 論文の評価

生成文法理論に基づく第二言語習得研究では、一般的に、生成文法理論のモデルそのものの記述と、その枠組みでの言語現象の記述および交差言語的比較に加え、言語習得を明らかにするための実証的データを扱うことから、実験的手法やデータ分析に対する手続きなどに関する記述が必要となる。これらの領域に関して、適切な理解の上に、新しく発見した言語現象についても、理論的基盤に基づく一貫性のある解釈を行っている。

論文の学問的意義・社会的意義については、フィリピン的小学校で学ぶ子供たちを研究対象としたことから、子供たちが一般的に考えられているほど容易に英語を身につけるのではないことを明らかにした点で、社会的な意義は大きい。小学校1年生や2年生だけでなく、5年以上教室で英語の文法や語彙を学び、理系の授業では英語を使用して授業内容を学んでいる子供たちの中に、単純な *wh*-疑問文の語順を誤って産出したり、文の形を変えて言語行為を遂行したりする学習者がいることを明らかにしている。学問的な意義という点でも、母語からの影響が表れやすい部分と表れにくい部分があり、それらが、これまでの第二言語習得研究で明らかにされてきたものとは異なることを示したことや、ある種の誤りが、低学年では（すなわち習得の初期では）現れず、中学年になると現れて、また、高学年になると消えるということを示している点は、500人を超える学習者からデータを集めた成果であり、非常に高く評価できる。

当該分野の研究に必要な言語能力という点では、英語、日本語、ビサヤ語のいずれも非常に流暢であり、大変優れている。基礎となる幅広い知識という点でも、言語学に関する広い知識を持ち合わせている。一方、本研究の遂行にかなりの時間を費やしたため、研究開始当時に一般的に受け入れられていた言語記述が、その後の研究で変わってきている部分があり、その変化については十分に理解できていない部分がある点は今後の課題として残る。しかし、本研究は言語習得のしくみを

明らかにすることを主目的としていること、および、理論的枠組みとしての文法記述の根幹的な部分は十分に理解していることから、全く問題ないと言える。

取り組んだ研究課題の活用については、学問的領域での研究発表等による学界への貢献という点から考えると、非常に高い応用能力を持つことを示している。500人以上の子供たちからデータを集めたことは、実験設定のための準備が順調に行えたことを表している。つまり、実験参加者となった子供たちのみならず、学校や地域の信頼を得ていることは明らかであり、今後も、年少者による第二言語習得の研究という点では、大いに活躍が期待できる。また、上にも述べたようにV1言語母語話者によるヨーロッパ言語の第二言語習得研究は、いわゆる国際ジャーナルにおいては、マダガスカル語を母語とする研究数点以外、ほとんど発表されておらず今後の研究に期待できる。また、社会での活用という面では、フィリピンでの言語教育に直接的な影響を与えるという面で可能となるほか、日本を含むアジアの子供たちの英語教育にも影響を及ぼすであろう。そのための能力として必要な、対人関係を構築する能力や文書作成能力などにおいても、非常に優れている。

今後、研究者として活躍するための倫理観も、全く問題なく、また、社会的責任に対する認識を持っていることも明らかである。これらは、最終試験の際のデータ収集の際の実験参加者を集めるための努力や、今後のフィリピン帰国後の活躍の展望などから、十分に伺うことができた。

5) 論文の総合的評価

第一に、論文の構成が的確であり、様々な新しい発見を丁寧に順序良く説明することで、複雑に見えるデータを紐解いて理論に基づき説明しているという論理性の高さ、また、ビサヤ語を含むV1言語の *Wh*-疑問文構造に関する新たな分析を展開したうえで、それをもとに、英語の第二言語習得研究を行い、結果としてその構造分析をサポートするデータを示しているという独自性、および、実証的データの分析を基に考察を深め、先行研究との違いを明らかにすることで、第二言語習得一般への示唆を行っている普遍性、さらに現地での実証的研究の大規模な実施でも示されている社会性・実行力の高さなど、論文から読み取れる質の高さが口頭でも確認することができた。高い評価を与えることができる。最終試験審査においても以上の点が確認され、合格と認めることができる。